

# 古仏語の tant

— tant aler から出発して—

伊藤了子

はじめに

本稿は古仏語の **tant** の基本的働きの記述を目的とする。

**tant P que Q** を分離型, **P tant que Q** を隣接型と呼び区別する。MÉNARD (1988) のように前者を **tmèse** と呼んで両者を区別しない立場もあるが、本稿では分ける方法を取って前者のみを扱い、後者に関しては稿をあらためる。

結論を先に述べると、古仏語の **tant** とは

1. 量の指示詞である。( > 範囲の存在を示す道具)
2. Q に向かう方向性を伴う：「(そこから) そこ Q まで」

はじめに **tant aler** の例の分析から **tant** の働きの仮説を導き、それが **tant sosfrir** 等にも応用できることを主張する。

例は *Corpus de la Littérature Médiévale* (以下 **Corpus LM**) 全体、とりわけ *Tristan en Prose t. II* (以下 *TP. t. II*) を参考にする。引用文に訳をつけるときは原則として P, Q の事態のみに限り、**tant** も **que** も訳の中に含まない。

現代語に関するキュリオリ (1992)、藤田 (1996)、フランケル (1989) は大いに参考になった。

## I. 古仏語 tant と現仏語 tant

古仏語の tant は動詞はもとより形容詞、副詞をも修飾することができる。また、que Q のみならず、com(e) Q も従える (MOIGNET, MÉNARD, HASENHOR)。

- (1) Et sachiés que li paveillons de Palamidés estoit **tant biaux et tant riches et fais par si grant estude et par si grant entente que a celui point peüst on un plus bel ne un plus cointe mauvairement trouver en tout le roiaume de Logres.** (*TP. t. II p. 271*)
- (2) Onques mais **tant** ne traveilla en un jour **com** il a hui fait! (*TP. t. II p. 334*)

このように古仏語の tant は現仏語の tant とは異なる振舞いをしているように見える。他方、現代語と全く同じに思われる用法も多く見られる。

- (3) **car il avoit tant sousfert et enduré u tournoisement que a poi k'il n'estoit mors d'anui et de travail.** (*TP. t. II p. 286*)

P=彼は騎馬試合で苦しんだ、Q=もう少しで苦惱で死ぬところであった。

本稿では形容詞と共起するケースや tant P com Q ではなく、現代語と同じように動詞にかかる tant の中で、現仏語にはみられない古仏語の用例の分析を行ない、そこから tant の基本的な働きに関する仮説を導き出すところまでを行なう。もちろんその仮説は tant P com Q や隣接型 P tant que Q, P tant com Q 等あらゆる tantに通じるものでなければならぬが、紙幅の関係から本稿ですべてを検証することはできない。

現仏語 tant と古仏語 tant の顕著な差は、古仏語 tant はさまざまな動詞と

共起する<sup>(1)</sup>が、中でも **chevalchier**, **aler** との共起が頻繁に見られることである。現仏語では動詞 **chevaucher** の使用頻度は少ないが、**aller** は無数にある。しかし、**aller** が **tant** と共起する例は筆者の調査した限りでは、次例以外ほとんどない<sup>(2)</sup>。

(4) **Tant va la cruche à l'eau, qu'à la fin elle (se) casse.**

「壺をあまり泉へ持って行くと終いには割れる」

これは古仏語の時代から存在した<sup>(3)</sup>ことわざなので現仏語ではなく、古い固定表現であると言ってしまうまでもであるが、それはさておき、(4)では **à l'eau** という移動の目標（着点と呼ぶ）を伴い、**aller** は「状態変化を伴う移動動詞」（つまり、「いる場所」からいなくなり、時間差を伴って別の場所（着点）にいるようになること）として働いていて、**tant** は **aller** の「回数」（つまり移動の回数）の概念と結びついている。

ところが、古仏語にはこれとは違う **tant aler** の用法も存在する。それについては次章で扱う。

## II. tant aler の aler (P) が意味すること

(5) A. I. jor de son ostel **mut** ある日彼は館を出る

**Por fère son pelerinage.** 巡礼をするために。

**Tant va par plain et par boschage,** P=草原や森を通して進む、

**Que au baron saint Jaque vint ;** Q=サンチャゴの領主の元に着いた；

(*Provost a l'aumuche* p. 113)

(5)ではPの移動の着点が事態Pの中には存在しない。その代わりに経路が示されている。その結果、**aler** は「状態変化を伴う移動動詞」としてではなく、移動行為そのものを表している<sup>(4)</sup>。

このような aler は、もともと様態を含む *chevaucher* (=aller à cheval) や *marcher* (=se déplacer par mouvements appuis successifs des jambes et des pieds sans quitter ; avancer ; aller à pied, *Petit Robert* より) などと同じ継続型の事行を表すと考えられる。tant と *chevalchier* との共起はすでに *Chanson de Roland* から見られるし、13世紀の散文 *Tristan en prose II* に至っては tant は aler, chevalchier, faire, dire との共起が最も頻繁である。この faire は代動詞で、出発のあと到着までを担当し、aler や chevalchier と同じ意味で用いられている (例6)。

- (6) Li rois s'em part atant et monte, **et tant fait k'il** vient au Castel as Puceles et entre dedens. (*TP t. II p. 264*)  
[s'en partir et monter > **tant faire** > **que** venir a . . . ]

したがって *dire*<sup>(5)</sup>を除く aler, chevalchier, faire はひとつにまとめて考察することができよう。

ここで aler の働きに関して用例に基づいて整理しよう。着点の有無が鍵である。

### 1. 着点を伴う aler

着点を伴う aler は「状態変化を伴う移動動詞」。

- (7) Li chevaliers fu biaux et cointes,/ 44 et par sa valor fu acointes/ du duc qui Borgoingne tenoit ;/ et **sovent aloit et venoit/ a la cort, et tant i ala/ 48 que** la duchoise l'enama/ et li fist tel samblant d'amors/ que, s'il n'eüst le cuer aillors,/ bien se peüst apercevoir/ 52 par samblant que l'amast por voir. (*Chastelaine de Vergi p. 2*)

「そして彼はしばしば宮廷に通った、そしてそこに何度も行ったので公爵婦人が彼を愛するようになった」

例 (4) と同様, **aler** は着点 (ここでは **i**) を伴い「状態変化を伴う移動」動詞として機能し, **tant** は「回数」の概念を表している。しかし, このような用法は, 古仏語でもごく稀にしか見られない。

## 2. 着点を伴わない **aler**

着点を伴わない **aler** は, **avancier** や **marchier**, **corir** のような動作行為を表す動詞の価値を帯びる。**tant** と共起している **aler** のほとんどはまさにこの用法であり, 有標のものと無標のものがある。

### 2-1. 有標の **aler** :

標識としては様態補語, 時間・空間補語が挙げられる。**aler** の様態補語としてはたとえば次のようなものが見られる (**Corpus LM** : <**tant et 6 alé**><sup>(6)</sup>)。

(8) **en tel maniere** (先行文中で表現された様態を受けて) ×34

**par tout . . . de long, de travers et de lé** ×1 「至る所, 縦, 横, 斜に」

**tort et droit** ×1 「間違ったり, 正しい道を」

**des talons** ×1 「かかとで」

**après la damoisele** ×1 「乙女の後から」

**avant** ×1 「先に」, 等。

(9) **Et quant li vallé est monté, mesire Tristrans li dist : «Va devant.»**

**Et li vallé le fait tout ensi com il le commande. Tant ont alé**<sup>(7)</sup>

**en tel maniere k'il sont venu dusc'a la fontaine u li cevaliers demouroit encore . . .** (*TP t. II* p. 306) 「このように=若い騎士が先に, トリスタンが後になり」

さらに, 様態補語のひとつに現在分詞がある。次例 (10) には **aler**+**-ant** が2つ含まれている。前者は「...し続ける」という移動を伴わない継続, 後者の **aler** は明らかに移動行為であり, **parlant** はその様態補語である。本稿

で考察の対象とするのは後者の用法のみである。

(10) **Que vous diroie je? Assés vait mesire Tristrans pensant a ceste cose, mais il n'em puet en nule maniere savoir la droite certainneté.**

**98. Tant ont alé, en tel maniere parlant de ceste cose, k'i sont venu a un petit castel ki fermés estoit sour une mote, (TP t. II p.**

**220) P=**このように、このことを話しながら、進んだ、 **Q=**彼らは小さい城にやって来た

様態補語以外に、aler が移動行為の動詞であることを明らかにするものに、「なん日も」、「その（狭い小）道を」、「峠を超え、谷を超え」、「戦場を通り抜けて」等、経路や空間・時間的幅を表す補語がある。

(11) 空間, 時間的幅を示す表現 : **de jour en jour, par lor jornees, celui sentier ; par voye ; por puil, por valee, ; par pui, par valee, ; les tertres, les puis et . . . ; par haut mer ; par tout ; de tere en tere ; de la en ci ; par la forest, par montaignes e . . . ; mont et valee ; parmi le champ ; par la contree, par val et par . . . ; par vaux et par monz ; par les montaignes, par les valees ; tote la riveiere ; par l'asamblee ; par le batail, ferant ; tout en estroit sentier.**

上記のような経路、様態等のマークがなくても、aler は移動行為の動詞として機能する。このような例は実は少なくない。

## 2-2. 無標の aler

重要なのは aler が着点を伴わないことである。

(12) **1236 Gavains cele part droit s'adrece** G. は真直ぐその方向に向かう

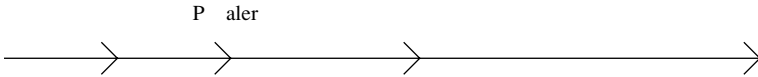
Et de joie se reconforte.

**Tant va qu'il vint** devant la porte P=彼は進む Q=門の前に着いた

Et vit les pons jus avalez. (*Première continuation de Perceval*, p. 33)

このように様態補語と時間・空間補語の両方あるいはどれかひとつを伴う場合もあれば、何も伴わない例もあるが、これら着点を伴わない **aler** は図 1 が示すような移動行為そのものを表しているといえる。P には着点が含まれないので、図のように **aler** は留まることを知らない。

図 1



次に Q の役割を見てみよう。

### III. Q の役割

Q にはどのような特色をもった事態が見られるのか？用例の観察によると、動詞の法はすべて直説法で、事行タイプとしては瞬間的なものがほとんどであるが、状態や継続が完全に排除されるわけではない。以下に 1. 瞬間的事態、2. 継続（状態）的事態の順で具体例を検討する。

#### 1. Q=瞬間的事態

例えば、Corpus LM 全体に対する〈tant et 6 alé〉の検索結果中〈tant alé que Q/ alé tant que Q〉141 occs. に対し、venir×63（着点（jusqu'）a. . ., chez 等を伴って「. . . にやってくる、到着する」の意）が最多。類似の意味を持つものとして、ataindre×7, revenir×2, parvenir×1, ariver×1, estre×6<sup>(8)</sup>, prendre port×1, aler×1<sup>(9)</sup>が挙げられる。この結果は〈tant et 3

vont, tant et 3 va〉 に関しても同様で、venir×34 が最も多い。

- (13) Palamidés monte esranment sour le cheval que li preudom li avoit fait amener, **et s'en vait** avoec lui ; et li esquier prenent les armes, tout ensi com Palamidés avoit commandé.

201. **Tant** ont alé en tel maniere **k'il sont venu dusc'a la maison du preudomme.** (TP t. II p. 358)

- (13') 〈s'en aler (O)〉, 〈**tant** aler (P)〉, 〈**que** venir (Q)〉

(13') の O, Q は点（出発点, 到着点）を表し, P は点と点の間で展開される事態であり, O から Q への方向性をもつ。そして「出発」>「行程」>「到着」というように事態間に自然な流れがあるのが特色である。

これら Q 中の到着を表す動詞によって, P の中では表されない移動行為の着点が表示されている。つまり, ある場所への到着まで移動行為が継続したことが明らかである。

図 2



移動行為の始まりは, partir や se metre en voie 等を含む先行文によって明記されている場合もあるが, aler が現働化していることすなわち始点の存在を意味するので, 必ずしも明記は必要でないし, されていない例も多い。

ここで, 一つの疑問が生じる。一体, P が Q まで継続するということは, Q は P の終点であることを含意するのだろうか? 「到着」以外の事態 Q を観察しよう。

次例のように Q の事行概念そのものが P の終点を表すものがある。

- (14) **Tant** a alé de la en ci /**Que** li quens **est mors** et honis.



(*Escoufle*, p. 87) Q=公は死んで辱められる。

- (15) O TU, CHEVALIERS AVENTUREUS QUI AVENTURES VAS  
QUERANT, **TANT AS ALÉ QUE TU TE DOIZ ARESTER.**

(*TP t. II p. 200*) 汝, 冒険を求め続ける冒険家の騎士よ, P=汝は進んだ

Q=汝は止まらなければならない。

「死ぬ」とその先はないので, **aler** を継続することは不可能である (14)。つまり **morir** は **aler** の終点を含意する。しかし, (15) では **s'arester** は **aler** が終わることを意味しても **doiz** (<**devoir**>) はそれが実現することを保証しない。他の例を見てみよう。

- (16) ne quiert onques repos avoir, il s'en vait par mi la mellee tous jours  
ferant a destre et a senestre. **Tant** a alé en tel maniere, cerquant  
les rens une eure cha et l'autre la, **k'il encontre** Dynadant,  
(*TP t. II p. 257*)

(16') <O=s'en aler>, <P=aler, cerquant>, <Q=encontrer>

- (17) ; et quant il est tous apareilliés, il se remet u tournoiemment et voit  
toutes voies querant celui dont on voit si grant bien disant partout.  
**Tant** a alé mesire Lanselos par l'asamblee **k'il trueve** monsigneur  
Tristran, ki bien aloit moustrant a celui point, en tous les liex u il  
venoit, qu'il n'estoit mie cevaliers a gas. (*TP t. II p. 295*)

(17') <O=se remettre . . . et aler querant>, <P=aler>, Q=trouver>

(13') 同様, (16'), (17') でも 3つの事態 O, P, Q の自然なつながりが見られ, P が Q まで継続することは明らかである。しかし **encontrer** や **trouver** という事行は移動行為と平行して生起することが可能なため, Q は P の終点としてのマークにはなり得ない。

以下は Corpus LM (**tant et 6 alé**; **tant et 3 vont**; **tant et 3 va**) にみら

れる「到着」以外の Q の事行あるいは事態である。

- (18) avaler×4 (= *descendre*), entrer×6, issir×1, remanoir×1 (= *rester*), choir×1 (= *tomber*), s'enbatir×1 (= *s'enfoncer*), amener×1, s'entrevenir×1, aprocier×1, passer×1, voir×7, choisir×2 (= *trouver*), trover×21 (捜していたもの, 偶然の両方), rencontrer×4 (= *venir en face*), s'entrecontrer×1 (= *se rencontrer*), oïr×1, perdre×2, anuier×1 (= *ennuyer*), s'entredire×1, s'accompagner×1 など。
- (19) **qu'il conmencha a ajourner**×1「夜が明けはじめた」; **Que le jour vint**×1「夜が明けた」; **font des cors pavemant**×1「遺体を敷き詰める」

これらはいずれも, P (進む) という行為をある範囲続けた結果, 事態 Q に遭遇するという意味に解釈できるが, Q は P (aler) の終点を保証するマークにはなり得ないものばかりである。

## 2. Q=状態

Q の事態が状態や継続を表す例はごく少数である。

- (20) **Et quant nos montons contremont par fol cuidier et par fol bobant, et nos avons tant alé que plus ne poons, et nos conoissons la droite verité de nostre estre et de nostre afere enconre** (*TP t. III p. 205*)  
 そしてわれわれが愚かな考えと愚かな傲慢さから上にのぼった時, P=我々は進んだ Q=もうこれ以上は無理である。

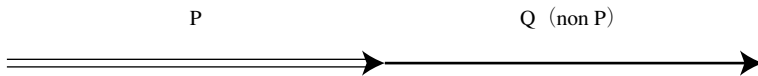
(20) では事態 Q そのものが non P の存在を表している。次の (21), (22) は同一テキスト, 同一頁からの抜粋である。

- (21) **Tant vont** li prince, qui Jhesus soit edant, P=公は進む  
 4660 **Que** l'avespree les **ala encauçant**. Q=日暮れが彼らを追いかける。  
 Emmi un pré, la **se vont arestant**. 野原の真ん中で歩みを止める。
- (22) Errant monterent, ne **se vont atargant** ; 即座に馬に乗り, 遅延しない。  
 Droit vers la mer se vont aceminant. 海に向かってまっすぐ道を進む。  
 4671 **Tant ont alé que il vont aproçant** Q=彼らは近付きつづける  
 Une lieue le grant tor au gaiant 巨人の大塔まで一里のところに  
 Que li boins rois Auberons li vaillant  
 Li desfendi sor les membres perdant.  
 Li solaus lieve, li jors **vait esclairant**.  
 (*Huon de Bordeaux*, t. XX, p. 228)

(21) も (22) も aler+-ant は文字どおりであれば「...し続ける」という意味になるはずであるが、文脈からは継続に解釈する必要は感じられない。90行からなる XXXVIII 章の脚韻がすべて -ant で、うち 22 行が aler+-ant により押韻している。(22) の 4661 行では s'arester 「立ち止まる」というような瞬間相の事行が aler+-ant になっているなどかなり無理が見られることから、このテキストの例は特殊であると考えてよいであろう。

(20) を図示すると図 3 のようになる<sup>(10)</sup>が、当然、一例だけでは一般化できない。

図 3



以上、事態 Q は瞬間的なものが圧倒多数である。どちらにしろ P (aler) は Q まで継続するが、事態 Q は必ずしも P (aler) の終点を含意しないことが明らかになった。このことは次章の事行主体の目的意識や P と Q の因果関係の有無の観察結果とも一致する。

## IV. P と Q の関係

## 1. 事行主体の目的意識の有無

(23) *et saciés que de vostre compaignie sui je mout liés et mout joians.*»

5. **Tant** vont en tel maniere parlant entre monsieur Tristran et le cevalier **k'il** viennent a la nef ki pour monsieur Tristran estoit apareillie. (*TP. t. II, p. 71*) Q=彼らは T. のために用意されていた舟のところに着く。

(24) Or venés après moi. »*Donc s'en vait devant, et li cevalier le vont si-vant après. Tant* ont alé **en tel maniere k'il** sont venu a **un estroit sentier ki avoit esté cevauchiés tout nouvelement.**

(*TP. t. II, p. 125*) Q=ごく最近馬を通ったばかりのある小道に着いた。

(23) では、Q の事行 venir が表す着点 (舟) は P の事行主体 *monsieur Tristran* が (意に反してではあるが国を去るため) 目指して移動していたものである。つまり目標なので、事行主体の目的意識がある。ところが (24) では不定冠詞の **un** と関係節の意味が示すように目標地点ではなく偶然が導いた地点なので、事行主体の目的意識はないといえる。次例のようにそのことが文章化されていることもある。

(25) **Si come aventure les moine** 偶然に従って

Ont tant de jour en jour alé P=来る日も来る日も進んだ

Que vers la mer sont avalé ; Q=海に向かって下った ;

(*Guillaume d'Angleterre, p. 63*)

(26) Ainsi se departit Travers. かくして T. は出発した。

**Tant va de tort et de travers** P=彼はでたらめに進む

Qu'il est venuz en son país. Q=自分の国に着いた。

(*Jean Bodel, p. 62*)

したがって **tant P que Q** 構文における **P** と **Q** の間の事行主体の目的意識は必然ではなく、事態 **Q** が **P (aler)** の終点のマークであるかどうかという観点からは、**Q** が事行主体の到達目標地点への到達を表すばあいのみ **P (aler)** の終点のマークたり得るといえる。

## 2. P と Q の間の因果関係の有無

**P** が **aler** で **Q** が **venir** の場合、進めばどこかに行き着くという意味では因果関係があると言えるのであろう。しかし、煙と火のような必然的關係は、たとえ次例にはみられない。

- (27) *se ja poïst pertuis trover/ par ou il se peüst anz metre ;/  
 tant va a destre et a senestre/ Renart, li rous, li maleïz,/  
 que, par devers le plesaïz, / trova. I. pel par aventure  
 qui iert usez de porreture/ par la ou . . . (Roman de Renart,  
 Br. XVIII, p. 5) P=R. は右に左に進む, Q=偶然一本の杭を見つけた*

以上 **P** と **Q** の間には、事行主体の目的意識も、因果関係も不可欠ではないことが明らかである。このような **P** と **Q** の関係の中で一体 **tant** はどのような役割をしているのか？

## V. tant とは？

(13') <s'en aler (O)>, <tant aler (P)>, <que venir (Q)> や図 2 の中で、**tant** は一体どのような役割を果たしているのだろうか？ **tant** はラテン語の **tantum** に由来するので、ラテン語を援用して **tant** を考えよう。

**tantum** は、量や大きさの指示詞である形容詞 **tantus** (*de cette quantité*,

**grandeur, aussi grand**) から派生した名詞 **tantum** の副詞的用法である。**tantum** にはさまざまな用法があり、**seulement** や限られた量を表すなど現代仏語からは考えられない働きもするが、基本的には形容詞と同じく「量や大きさの指示詞」であると考えられる<sup>(12)</sup>。

このことから、われわれの古仏語の **tant** も **tantum** と同じ働きをするという仮説をたてる。

(28) 仮説：古仏語の **tant** は量や大きさの指示詞である。

「量や大きさの指示詞」であるということは **tant** 自体は量（大きさ）を表さない。量が無限ではなく有限、すなわち範囲が存在する (=fragment) ことを表すと同時に、その範囲を **P** の外に求めよという指示を出すと考えられる。仮説 (28) は次のように応用解釈することができる。

(28') **tant** は範囲の存在を表し、その具体化は外 (**Q**) に求めよと指示する。

(28') を **tant aler** に当てはめるとどうなるか？ II, III 章で、**Q** は必ずしも **P** の終点のマークになりえないことを明らかにしたように、**Q** の生起を境に **non P** の存在を含意するものではない。そのことから、図 1 で表されるような **aler** という移動行為の広がりには範囲があることを示すのが **tant** であり、範囲の具体化をしているのが **Q** である、言い換えれば **Q** の生起までは **P** の継続が保証されるということで、**tant** は **P** の継続範囲 (**Q** まで) が存在することのみを示しているといえる。

(29) **tant** = 「そこ／あるところ・まで」、**aler** = 「進む」。

「そこ、あるところ」とは？ = **Q**

1) **Q** が前方（先行文脈）にある場合、「そこ」はそれを指示する。

- 2) **Q** が先行文脈にない場合、「あるところ」が指すものを後方に求めよ。そこには (que) **Q** があるはず。

そして、**Q** 以降の **P** の継続如何に関しては **tant** の責任範囲外であり、それを明らかにするのはあるときは **Q** そのもの (例 14) であったり、またあるときは後続文脈 (30) であったりする。

- (30) **S'ot le chaut si lou roi mate,** 熱さが王を打ちのめしていた  
**Un ce que il ot jeüné,** 彼は何も食べていなかったこともあって  
**Que de repos mestier eüst,** 休息が必要であったのだが、  
**Qui un biau leu trover peüst.** もし快適な場所を見つけられるなら。  
**S'ont tant alé que il troverent** **P**=彼らは進んだ **Q**=一本の大きな木を  
**Un grant arbre o il s'arestèrent ;** 見つけ、そこで止まった；  
**Desoz avoit une fonteine.** (*Pr. cont. de Perceval*, p. 391)

さらに、**tant** がある範囲 (fragment) を表すことは、**aler** の時制によっても裏づけされる。つまり **aler** の直説法半過去との共起はごく少数しか見られないが、現在形 (歴史的現在)、複合過去形、単純過去形との共起は頻繁に見られる<sup>(12)</sup>。

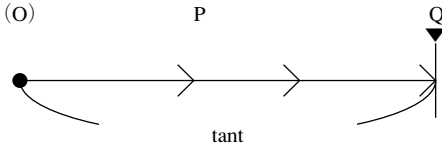
### 結論に代えて

(29) は例 (4)、(7) のような「**tant aler**+着点」の **tant** も説明することができる。「回数」の概念は結局、事行の「反復」的生起によって生じるので、時間・空間の継続的流れが、断続的な流れに、つまり実線が破線に変わるだけで、基本的な図式に変わりはない。**ferir** のような瞬間相の事行と **tant** の共起に関しても同様である。

さらに、**sosfrir** のような抽象概念の事行にもあてはめることができる。苦、

喜怒哀楽、愛など形容詞が表す概念（「苦しい」）と結びつきが深い抽象概念の事行（「苦しむ」）は、「量」よりもむしろ「質」と関係があるように思われるが、しばしば量副詞によってその「大小」や「程度」が表される。大きさや程度には段階が前提となっている。言語によっては時間・空間段階は水平の線のイメージで表現されるのに対し、「程度」は垂直の線のイメージで表される。しかし、縦横の違いは慣習の問題であって、基本原理は同じである。

図 4



以上、「古仏語の **tant** は量や大きさの指示詞である」という仮説を提示し、様々のケースは「量」と「指示詞」の解釈を広げることによって説明され得るということを主張した。

## 註

- (1) 存在, 要求, 感情, 評価, 授受, 思考等々, 多岐に渡る。例: **i avoir, aviser, cerchier, conjurer, conoistre, conter, se deliter, demander, endurer, ferir, penser, souffrir, regarder, user, plaie, etc.**
- (2) **Frantext, NISHIMURA** 等
- (3) 15 世紀のものが多いが, **Gerbert de Montreuil, Continuation de Perceval (compos. 1226–1230)** や **Roman de Renard (compos. 1175–1250)** にも見られる。
- (4) 現仏語でも **aller** は着点を伴うばあい「状態変化を伴う移動動詞」として機能するが, 着点を伴わずに様態補語を伴うと「行く, 進む」(**Cette voiture va vite. この車は速い. ~à grand pas** 大股で歩く, **~comme le vent** 風のように走り行く, **~bon train** 大急ぎで行く, 等) のように **marcher, courir, avancer** 等, 行為を表すことができる。(例: **Royal** より)
- (5) **Pronom neutre, tant a valeur d'ana- et de cataphorique: Tant** (**《voilà ce que tu》 li diras de par moi (Tr. 162) (HASENOHR p. 99)**)
- (6) <**tant “et 6” alé**> で検索をかけると, **6** 語以内に **tant** と **alé** が共起するものを拾い出してくる。でてきた例を検討し, 該当例のみを取り出した。
- (7) この例 (10) の助動詞は **avoir** であるが, 古仏語では **aler** の助動詞としては **a-**



voir と estre が競合している。「*Aler, avec l'auxiliaire avoir, prend la valeur de faire route, marcher.*」(MOIGNET, p. 183)

- (8) **Tant a alé qu'il i est prés ; P=彼は進んだ Q=彼はその近くにやってきた ;**  
 (9) **et li rois Yons, qui [50] aloit les rens cerchant, a tant alé parmi le champ qu'il ala en la place ou il trouva monseigneur Yvain tot a pié entre ses ennemis, (*Mort le Roi Artu (La) 183 - p. 234*) aler+場所の補語(着点)で、この Q の aler は「状態変化を伴う移動動詞」であって、ariver と同義と考えられる。**  
 (10) P と Q の同時平行は多くのばあい、**tant com** によって表される。  
 (11) **Gaffiot 参照**  
 (12) 半過去形 **alot×19, alout×5, aloit×959, aleit×2, alloit×33, allait×60, aloent×5, alouent×3, aloient×393, alaient×1, aleient×2** の中で、〈**tant aloit/aloient**〉が**3**例しかない。現在形：**tant va×47 ; tant vont×39** 単純過去形：**tant ala×46, tant alerent×8**

#### 参考文献

*Corpus de la Littérature Médiévale, En langue d'oïl des origines à la fin du XVe siècle, Prose narrative — Poésie — Théâtre*, Champion Electronique 2001.

Frantext および DATA NISHIMURA

Gaffiot F. : *Dictionnaire illustré Latin Français*, Hachette, Paris, 1969.

Godefroy F. : *Dictionnaire de l'Ancienne Langue Française du IXe au XVe siècle*, Champion Electronique 2002.

Petit Robert Electronique

藤田知子 (1996) : 「tant における程度・結果・比較」, 『フランス語学研究』第 30 号, pp. 1-13.

CULIOLI, A. (1992) : “Un *si gentil jeune homme!* et autres énoncés” *L'information grammaticale*, no. 55, pp. 3-7.

FRANCKEL, J.-J. (1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels en français*, Droz.

MOIGNET G. (1973) : *Grammaire de l'ancien français*, éditions Klincksieck.

MÉNARD F. (1988) : *Syntaxe de l'ancien français*, éditions Bière.

HASENOHR, G. (1993) : *Introduction à l'ancien français*, sedès, Paris.